

みことばを實踐する〔要約〕

Iヨハネ2:3~6

- 3 もし、私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知っていることがわかります。
- 4 神を知っていると一言いながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。
- 5 しかし、みことばを守っている者なら、その人のうちには、確かに神の愛が全うされているのです。それによって、私たちが神のうちにいることがわかります。
- 6 神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。

月に一度、私はヨハネの手紙第一をメッセージさせていただいております。今回で3回目ですが、この手紙で強く言われているのは、神様との個人的な関係、すなわち交わりとは何であるかということです。今日取り上げる箇所はIヨハネ2:3からですが、その前に今日から皆さんと一緒に暗証聖句をしたいと思っております。場所はIヨハネ4:7-10です。ここにこの手紙の大事な部分が凝縮されていると思うからです。

Iヨハネ4:7、愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。

Iヨハネ4:8、愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。

Iヨハネ4:9、神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。

Iヨハネ4:10、私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

「愛し合ひましょう」という言葉は、ただの愛情ではありません。原語のギリシャ語でアガペーと言って、無償の愛を意味します。それを人は生まれつき持っていないのです。しかしイエスを信じた者は、神様の愛を知っただけでなく、神様の愛で愛し合うことができるようにされているのです。こんなに素晴らしいことはありません。毎回、私は覚えて臨みたいと思っております。皆様もぜひ覚えて、次回一緒に言ひましょう。

さて、今日のメッセージは2:3からです。

① Iヨハネ2:3、もし、私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知っていることがわかります。

Iヨハネ2:4、神を知っていると一言いながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。

3節に、「もし、私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知っていることがわかります。」とあります。「みことばを守る」というのは完全に守れているということではなく、守ろうとしているという姿勢のことが中心です。

「知る」という言葉は、「人は、その妻エバを知った」(創世記4:1)ということばが夫婦の親しい関係を表しているように、単に顔見知りであるという意味ではなく特別に親しい関係にあるということです。

ある牧師先生は、この「知る」ということの違いを「テレビで知っている人」と「友人」に例えていました。例えば、大谷翔平という今有名なプロ野球選手がいるのですが、彼をテレビで知っていても、その人と気軽に電話もできないし、実生活がどのようなかを知ることもできません。親しくないからです。しかし親しい人とは一緒にいられますし、悩みを分かち合うことができます。ですから、「神様を知っている」というのは「神様と近い」、「神様と非常に親しい」ということです。神様が求めておられるのは知名度ではなく親密さなのです。しかし、言うまでもないことですが、もし口では「私は神様を良く知っている。神様と親しい」と言っていたとしても、その行動や行ないが神様のみこころに全くかかっていない生き方をしているとしたら、その人の口にするのは嘘になるのです。

ヤコブ書ではよりはっきりと指摘されています。

ヤコブ2:14、私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行いがなければ、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。

ヤコブ2:15、もし、兄弟また姉妹のだれかが、着る物がなく、また、毎日の食べ物にもこと欠いているようなときに、

ヤコブ2:16、あなたがたのうちだれかが、その人たちに、「安心して行きなさい。暖かになり、十分に食べなさい」と言っても、もしからだに必要な物を与えないなら、何の役に立つでしょう。

ヤコブ2:17、それと同じように、信仰も、もし行いがなかったなら、それだけでは、死んだものです。非常に厳しい言葉ですが、信仰は行ないに出でくるということです。もし心から信じているならば、その信仰はその人の生き方に影響します。神様のみことばを守りたいと思うようになります。

ここに世の中の人とクリスチャンの違いがあります。良い行ないについて聖書は多くを教えています。そして善良な人はたくさんいます。彼らとの違いは、その動機です。

クリスチャンはイエスを信じる信仰の結果、行ないが出てきます。イエスを信じていなければ、当然信仰はありません。見える行ないが良くても、その動機は絶対に異なります。私たちが陥りやすいのは、道徳や行ないの良さを見て人を測ることです。パリサイ人や律法学者は、神に認められるためではなく人に良く見られたいから行ないを良くしました。しかしイエスは彼らを、「白く塗った墓」と呼びました。

マタイ23:27、わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまへたちは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいです。

マタイ23:28、そのように、おまへたちも外側は人に正しく見えても、内側は偽善と不法でいっぱいです。外面は良くても、中身は汚れていたのです。良い行ないの動機は人それぞれですが、神様が見ておられるのはその動機が信仰から出て来ているかどうかなのです。

② Iヨハネ 2:5, しかし、みことばを守っている者なら、その人のうちには、確かに神の愛が全うされているのです。それによって、私たちが神のうちにいることがわかります。

Iヨハネ 2:6, 神のうちにとどまっていると云う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。

では、どうしてみことばを守っている人は神を知っていると言えるのでしょうか。それは、その人がイエス様の愛を知っているからです。

みことばを守る、とは究極的には聖書全体のみことばを指していますが、分かりやすいのは律法です。特に十戒を取り上げますが、

①唯一の神様以外、あってはならない。②偶像を造ってはならない。③神様の御名を軽々しく扱ってはならない。④神様との時間を聖別しなければならない。⑤父と母を敬う。⑥殺してはいけない。⑦姦淫してはいけない。⑧盗んではいけない。⑨嘘をついてはいけない。⑩他人のものを欲しがってははいけない。

これをさらに、イエス様は表面的な戒律ではなく心の問題として解き明かされました。

マタイ 5:21, 昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない』と言われたのを、あなたがたは聞いています。

マタイ 5:22, しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければならない。兄弟に向かって『能なし』と言うような者は、最高議会に引き渡されます。また、『ばか者』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。

マタイ 5:27, 『姦淫してはならない』と言われたのを、あなたがたは聞いています。

マタイ 5:28, しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。

律法は行ないどころか、心のレベルで守っていないと本当に守ったことにならないのです。厳しすぎて、息苦しくてたまらなくなりますね。このような律法の数々はパリサイ人や律法学者たちが守ろうと努力していた過去のものです。今は福音があるから関係ないと思うかもしれませんが、しかし実は今も大事な要素なのです。福音と律法には密接な関係があります。それはイエス様が律法についてこのように語られたからです。

マタイ 22:35, そして、彼らのうちのひとりの律法の専門家が、イエスをためそうとして、尋ねた。

マタイ 22:36, 「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。」

マタイ 22:37, そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』

マタイ 22:38, これがたいせつな第一の戒めです。

マタイ 22:39, 『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。

マタイ 22:40, 律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。

「律法全体と預言者」とは、旧約聖書全体のことです。旧約聖書全体のありとあらゆる命令が、「神を愛すること」と、「隣人を愛すること」を現わしているということです。律法の一つ一つが、「愛する」とはどういうことかを本来は教えているのです。ですから旧約聖書の、特に命令が出てくる時には、「愛する」とはどういうことか、を教えていると思つて読まれることをお勧めします。

すごいのは、6節で「みことばを守ることがキリストのように歩むこと」と書かれていますから、イエス様は完全に律法を守ったということです。言い換えると完全に神も人も愛したということです。しかしパリサイ人や律法学者達は、神の命令を救いの条件と考えて、外面的な決まりにしてみました。

ではイエス様が心の問題で律法を取り扱われたので、それを守れば良いという問題なのでしょう。聖書は、ローマ 3:23, 義人はいない。ひとりもないとあるように、そもそも律法を守れる人、明確に言えば神様と人を愛せる人はいないと言ひ切ります。ですから私たちは、誰も神様を愛することも、人を愛することもできなかったのです。しかし、イエス様は、神も人も愛せないすべての人のために死なれました。神や人を愛することは救いの条件ではありませんでした。逆に、神に愛されることが救いの条件だったのです。

Iヨハネ 4:10, 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

イエス様の愛を知れば知るほど、この方に従いたいと思うようになるのです。同じように愛に生きたいと思ひます。それは、自分ができるからではありません。ただ、自分を愛してくださったイエス様を愛しているからです。私は、年々愛が増すどころか、愛せない自分を新たに発見してばかりです。愛することにおいて、自分に欠陥があるように思ひます。悔い改めばかりです。しかし、それでもイエス様に近づきたいと思ひます。この方しか、私を絶対に愛してくださる方はいないからです。

5節には「みことばを守っている者なら、その人のうちには、確かに神の愛が全うされているのです」とあります。完全に神様が共におられて、愛が満ちているということです。

例えどんなに弱くても、至らなくても、みことばを守る、すなわち愛することを求める。その時に神様はその人を通して神様の愛を現わしてくださるのです。ですから、神様に用いられたいと願う方がいらっしゃれば、ぜひ「みことばを守る」=「愛する」ことを神様に祈り求めることを始めてみてください。

最後に12-13節をご一緒に読みましょう。今までの勧めがなぜ書かれたのかという理由が書いてあります。

Iヨハネ 2:12, 子どもたちよ。私があなたがたに書き送るのは、主の御名によって、あなたがたの罪が赦されたからです。

Iヨハネ 2:13, 父たちよ。私があなたがたに書き送るのは、あなたがたが、初めからおられる方を、知ったからです。若い者たちよ。私があなたがたに書き送るのは、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。

なぜ今までのことを書き送ったのでしょうか。それはできない者を責めるためではありません。既に罪が赦されたからです。私たちが神様を知らない愚か者だからではなく、神様を知った幸いな者だからです。私たちが戦いに敗北する者だからではなく、既に勝利が約束されているからです。これらはみな、すでにイエス様が成し遂げてくださったものです。このイエス様が私たちを愛し、ともにいて進んでくださいます。だから私たちは絶対に前に進んで行けます。安心して、前に進んで行きましょう。